

# 地曳き網漁からみた渥美半島の地域差

野地恒有  
Tsuneari NOJI

地域社会システム講座 (民俗学)

## 序一渥美半島と地曳き網

渥美半島における漁業関係の民俗研究では、漁業と村落組織との関係が注目されてきた。竹田旦 (1949), 秋葉隆 (1953), 村武精一 (1955) がそれである。そのなかで、秋葉 (1953) は地曳き網の網元をその存在形態と儀礼からとらえた。秋葉論文には渥美半島の地域差を地曳き網の網元からとらえる視点が示されている。

秋葉は、まず、網元の存在形態を類型化して次のようにまとめた。A型として「網がいわゆる親方株で、網元が世襲的に特定の有力な漁家に固定しているもの」、B型として「網が村中の漁家の開放的な組によって共有されるために、ほとんど村網の観を呈し、網元が毎年の選挙で交替するもの」、C型として「網がいわゆる株持ちで、特定少数の漁家の封鎖的な組によって共有され、網元がその封鎖集団内に固定するもの」である (秋葉 1953: 21)。A型の例として渥美町宇津江、B型の例として赤羽根町高松 (一色地区)、C型の例として田原町波瀬をあげ、渥美半島太平洋岸はB型、その内湾側はA型またはC型と指摘した。さらに「Aが最も古い形、Bが最も新しい形で、CがAからBへの過渡の形」と予想した。

次に、網元の役割における信仰的側面を指摘した。赤羽根町高松の一色地区における網元の信仰的な役割について次のような事例を報告した。

「網元の家にはオデイ (客間) の床の間にオタマヤがある。……オタマヤは網元の家で祭の大漁祈願の神々のやどる所で、旧暦十二月八日頃吉日を選んで、旧網元の家から新網元の家に移す行事がある。それには網子の中から穢れのない二、三名の若衆が選ばれて新旧網元と共に海に出て、打ち寄せる波で水垢離をとる。それから氏神 (一色神社) の祓宜が来て祓いをした後、潮の満ちて来る時を見計らって、新網元の家へオタマヤを移すのである。……氏神の祓宜が来て、お祓いをすませオタマヤを迎えて新しく網元となった家では、それより一年の任期中、きわめて敬虔な生活を送らねばならぬ。即ち、文字通り肉食 (四足を食うこと) を禁じ、葬式に参加しても葬具に触れてはならない。オタマヤは毎日祭るが、なお毎月

一日、十五日、二十八日には船に祀ってある船玉に飯を供えて拝む。」 (秋葉 1953: 21)

ここで報告された内容の要点は、網元の自宅における漁業神祭祀 (オタマヤ)、網元交替に伴う漁業神祭祀の移動、網元の禁忌である。

本稿では、渥美半島の地曳き網漁について経験者からの聞き取り資料をまとめる。その聞き取りは、網元の社会的・信仰的な位置づけを中心におこなった。そして、秋葉論文を検証するとともに、渥美半島内の地域差を指摘する。

本稿は愛知県史編さん委員会編『愛知県史民俗編』執筆のために進めている筆者調査により得られた資料をもとにしている。その調査期間は1996年から2001年である。(2003年8月田原町と赤羽根町は田原市に合併したが、本稿では、渥美半島内の地域差を表すため、合併以前の旧町名を用いた。)

## 1 網元の存在形態

地曳き網の組織と網元の存在形態について、秋葉論文の類型分けをもとにまとめよう。

### ①A型の網元

A型の網元は、渥美町中山と渥美町和地でみられた。

渥美町中山では、1947年頃の地曳き網の網組のうち、戦前からあった網組には、丸イ網、四郎作網、清九郎網、山半網、丸久網、数兵衛網、松右衛門網、清右衛門網、惣吉網、山三網、丸坂網があった。戦後にできた新網には、利七網、丸仲網、クラ網、芳吉網、丸九網、保二網、山三新網、多代吉網、赤文網などがあった (漢字化にあたり渥美町在住の郷土史家清田治氏の教示を得た)。主にオヤカタの名前や屋号が網組の名前になっている。その後、オキドリ (2艘引き) に若い衆が行ってしまい、人がいなくなったため、これらの網組の地曳き網はおこなわれなくなった。最後には、オヤカタたちが仲間になって、地曳き網をおこなったが、これも、1952年頃にはなくなった。

オヤカタとは、船、網、道具などを所有している、いわば経営者である。それに対して、操業上の指示をする運営の指揮者をアンモトといった。たとえば、山半網のオヤカタはヤマハンであり、そのアンモトはカワイヨリタロウ (依太郎) (ニザエモン) だった。オヤカタとアンモトの関係はずっと決まっており、1年ご

とに代わるということではなかった。オヤカタとアンモトが同じ場合もあった。オヤカタたちの中に、ネンギョウジが2人いた。正月のサンヤビマチには、オヤカタがネンギョウジの家に集まって、その年の決めごとをおこなった。地曳き網を新たに始める人はこの日に申し出て権利金と保証金を払わなければならなかった。また、このときには地曳き網をおこなう浜の位置（アミカケバ）も決めた。これをバワリという。戦後、22ジョウになったとき、1度に網をかけられないので、偶数奇数に分けて、半分上がってから一方が網を入れるということをやった。翌日にはその逆でおこなった。

正月2日のノリゾメには、アンゴとなる人たちがオヤカタの家に集まって、カオアワセをおこなった。毎年アンゴがほぼ決まっている網組もあった。

コウナゴアミには、アンゴが24、5人いた。そのうち、ナヤカタ（ニボシを煮るもの）が4人くらいいた。船（ジビキブネ）は1艘だった。船に乗るアンゴサ（網子）は、17、8人で、カタアミに8、9人乗った。船には、ロコギが4人、ヤシとアバシ、櫓の交替と、8人くらい乗っていた。おもりを担当するのがヤシ、浮きを担当するのがアバシだった。アバシの作業がむずかしかった。アンモトは、アカミヤグラでアカミを見たり、ボタ（砂浜の高いところ）で魚見をした。アキアミにはアカミは4人くらいいた。

カシキが2、3人いた。13歳前後の若者だった。カシキの仕事には次のようなものがあった。西山にたきものをとりにいく。食事を作る。カワベ（魚を入れる籠のこと）を運ぶ。自分の網が網をかけていないとき、別の網からおかずをもらいにいく（これをシイノミヲモライニイクとかエンバイという）。網をかける最初の網をシンヅナというが、その網をとる。カシキの役は、次の若い衆が入ってくるまで続けなければならなかった。カシキになる若い衆はオヤカタが来てくれと頼みにいった。若い衆は親が入っている網に入るもので、所属する網組は決まっていることが多かった。そのほかに、船に乗らずにオカで働く人のことをオカボウという。これには年よりが多かった。

分配をアタリという。アンモトは2人前、船に乗る若い人には1人前のほかにボーナス（ブ）がついた。一人前を1クチと書いた。オヤカタは、船のクチ、網のクチ、道具のクチなどをとった。船のクチは2クチだったが、それは、若い衆のブとして分けたものだった。オヤカタは、四分六の4ブくらいをとった。その4ブからアンゴへのお礼を出したので、3ブくらいがオヤカタの取り分だった。ふつうのアンゴは1人前、センドウやカシキは1人前とお礼だった。

渥美町和地には地曳き網が2統あり、一つの網組は赤羽根町越戸の柳原忠兵衛がアミモトで、それは1935年頃までであった。1935年頃まで、2kmくらい沖に網を

入れてあげる地曳き網（オキノアミ）がおこなわれており、サバやタイをとった。

## ②A型からB型へ変化

A型からB型の網元への変化がみられた地域は、豊橋市東赤沢、赤羽根町赤羽根、赤羽根町池尻、渥美町宇津江である。

豊橋市東赤沢には、ヤマサ（ン）アミとイチアミという地曳き網が2組あった。話者（大正15年2月生まれ）の親の代には、イチアミとオオアミという網があったという。ヤマサアミとイチアミにはそれぞれアミモトがあった。第2次世界大戦中、イチアミが先になくなり、網組がヤマサアミだけになった。さらに、1941年頃、物資や人手が不足して、ヤマサアミはムラアミ（東赤沢による運営）になった。1959年、伊勢湾台風で船がすべて流されて、地曳き網をやめた。その後、チリメンとりの機械船を、村で買って操業したがそれも続かなかった。機械船を浜に上げたり下ろしたりする作業がたいへんだった。チリメンとりは約5年間おこなった。1973年から、東赤沢の11人で温室農業（メロン）を始めた。さらに、10年後に、花卉栽培を始めて現在に至っている。

ムラアミになったヤマサアミの役割には、アミモト、コアンモト、チョウジンマイ（会計）があった。チョウジンマイは2人だった。それぞれの担当は、網に関わっている者の選挙で決めた。地曳き網の関係者は40人から50人いた。網が2条ある頃には、1網あたり25人から30人でやっていたので、地曳き網に関わっている人は60人前後あった。東赤沢の戸数は60から70だった。地曳き網にはだいたい1軒から1人出ていた。選挙は、旧暦12月25日頃にアンモトの家でおこなわれた。広い家の人は何回もアミモトになった。それぞれの役割を2年続けることはできた。

このほかに、崖（ホウベ）から魚群を見て指示を出すイロミが2人いた。木の長い棒を2本作って、これで漁の指示を出した。「アミ」という合図（網を早く船にのせろ）、「シラ」という合図（船を出すときに船の下に敷くコロを出せ）などがあった。イロミは漁の指揮者であるので、よほど恰幅のいい人でなければできなかった。毎年同じ人がイロミになった。

赤羽根町赤羽根の西区（赤西）には網組が2組あり、1948年頃までおこなわれていた。その後、2艘引きのシラス漁にかわった。中村区（赤中）には2組あった。東区（赤東）には1組あり、ホンダ網と呼ばれた。二ノ谷には1組あり、キュウヒチ網と呼ばれた。

赤羽根の中村区（赤中）には平三郎網と平九郎網の2組があった。それぞれのアミモトが伊藤平三郎と伊藤平九郎だった。平九郎はイワシの加工をも専門でおこなっていた。その後、アミモトを選挙で決めるよう

になった。イワシの加工も網組自身がおこなうようになった。

西区(赤西)には、地曳き網として、ヤマタアミとカネウアミがあった。ヤマタアミのアミモトはタヘイジであり、カネウアミのそれはウヘイだった。話者(大正13年生まれ)の頃には、特定のアミモトはなく、選挙によってアミモトを決めていた。旧暦12月中旬までに選挙をやって、アミモト、会計、オボシ(販売担当、サバクリともいった)、ハマオトコを決めた。1年ごとに代わった。ハマオトコには若者2人がなった。

赤羽根町池尻では、大正時代の頃、チュウハチアミ、トクジロウアミ、カワショウアミ、ヤマショウアミの4つの網組があった。アミモトは、個人の株主であり、村でも財力のある人であった。その後、地曳き網はセコ網という形になった。話者(昭和10年生まれ)が知っているのはセコ網という。1953年頃には地曳き網はセコ単位でおこなわれていた。池尻には6セコあって、その2セコ(フタセコ)単位で網を持った。網は池尻で3ジョウあったことになる。ノボリアミ(ノボリセコの網)、ナカセコアミ、クダリアミ(クダリセコの網)といった。網組には1軒からひとりが出たが、中には、親子で二人出た家もあった。

沿岸の近いところに網をかけるときには牛1頭で網を引いた。これをオカアミといった。約1500メートルの沖に網をかけるときには牛2頭で網を引いた。これをオキアミといった。オキアミの場合、潮で網が流されるので、3ジョウあっても、今日はナカセコアミ、明日はノボリアミ、次はクダリアミというようにセコごとに順番を割り振って網をかけた。

地曳き網がおこなわれなくなって、1950年頃からセコ単位で機械船を2艘作り、シラスをとった。2艘引きで焼き玉エンジンだった。遠州灘の舞阪口から伊良湖岬沖のガイカイ(外海)で操業した。1船に約10人乗っていた。網上げは手でおこなった。チリメンを主体として、漁期は3月から12月だった。コウナゴやシラウオもとった。漁獲は漁業会に出したり、仲買に出したりした。1957年頃までおこなった。セコ網の機械引きをやめてからも、有志で、1965年くらいまでその機械引きをおこなった。豊川用水ができて、その機械引きも終わった。

池尻の1セコの戸数は45から50だった。地曳き網には30人から40人が出た。そのなかに、責任者としてアンモトと会計とオボシ(世話係)がいた。責任者は年の順で選ばれた。正月にカンジョウイワイをアンモトの家でおこなったときに改選した。2期連続の人もあった。セコの中で裕福な家にヤドになってもらって、若者はそこで寝泊まりした。ヤドはアンモトとは限らなかった。朝早く魚が来た場合、アンモトが若者に起こしにヤドを回った。盆と正月が勘定で、水揚げを平

等に分配した。アンモトと会計の配分率も同じだった。オボシという役割は、手伝いに来た人に魚を分けたり、仲買が買いに来たときに交渉したりした。地曳き網では牛を使ってろくろで引いたが、誰の牛を出したかをオボシが記録した。ウオミになるのは、長老の人が多かった。崖(ホウベ)の高いところに、ウオミをするところがセコ網ごとにあった。そこには、セコ単位でボンギを立てた。ボンギは海がよく見えるところに立てた。これをオクリョウサマといった。セコごとにウオミをしているホウベの下に、アンゴが休む場所を作った。この場所をボタといった。冬にはそこで焚火をしたり、夏には日除けにしたりして、待機していた。

渥美町宇津江では、明治末から大正初めの頃には地曳き網が3組あったが、大正中期には、ヤマナカとマルナカの2組だった。この二つは交代で網を曳いた。宇津江の沖にはコウナゴの通る漁場があった。宇津江の網は、初めは個人経営であり、有力な人が網元になった。これがマルナカである。マルナカは庄屋だった。その後、アンゴが独立して共同網を作った。これがヤマナカである。マルナカのアンゴがいなくなってすたれ、株をアンゴにも持たせるようになったため、この網も共同網になった。1932年にはヤマナカとマルナカが一つになり、1947年まで続いた。その後、バッチ網(底曳き網)に代わった。

網元とオヤカタは同じ意味であるが、あえて区別し言えば、共同網の場合はオヤカタといい、個人の網では網元という。共同網では、3年でオヤカタが交代した。年齢と人気、実力によってオヤカタは決まった。選挙ではなく話し合いで決めた。1年間の地曳き網の勘定が12月頃にあるので、「2年、3年やったで代わらして」といってオヤカタが交代した。

コウナゴ網は個人網で、秋網を引退した人、学校に行っている子供、女性などが曳いた。共同網ではコウナゴはとらなかつた。コウナゴは毎年同じようにはとれず、3年も5年も続けてとれないこともあった。コウナゴ網をやっている人の中で、バッチ網を最初に手がける人が出た。(宇津江の事例は服部誠氏の聞き取り調査資料を用いた。)

### ③B型の網元

B型の網元は、豊橋市伊古部、赤羽根町高松(一色地区)、渥美町和地である。伊古部と高松(一色)には、B型の以前にA型であったという伝承はとらえられない。伊古部では「網中は昔から『村網』と云って、部落共有の網であったが、明治中期以降は、出資者が費用を出しあって整えた共有網であった」(伊古部郷土誌編集委員会 1988:526)とあり、高松(一色)では「網元の一年交替の制度の如きも、村の古老達の知らない昔からあったもの」(秋葉 1953:21)とも述べられて

いる。また、和地にはB型とA型の網元が併存したが、和地のA型の網元は渥美町和地以外に在住する者（赤羽根町越戸）であった。

豊橋市伊古部には地曳き網が2組あった。西伊古部の網は、ニシアミとかヤマニアミといった。その船は住吉丸といった。東伊古部の網は、ヒガシアミとかヤマキアミといった。その船はヤハシラ丸といった。1955年頃まで地曳き網をおこなった。1966年頃に、豊川用水が来るようになって、農業が中心になった。浜がすたれてきて、東網が先に観光網（地曳き網）を始めた。その約4年後に、西網でも観光網を始めた。現在も東伊古部の観光地曳き網はおこなわれている。西伊古部ではおこなわれていない。

地曳き網をおこなっていた頃、西伊古部の世帯数は約40、東伊古部の世帯数は約50だった。東伊古部でも西伊古部の網（西網）に入る人は4、5人いた。その人たちは昔から西網に来ていた。西伊古部の人で東伊古部の網（東網）に入る人はいなかった。1網は約40人だった。村人で網組に入っていない人は3、4人だった。1軒から何人出てよかった。

網組の役割には、アミモト（アンモトともいう、網元のこと）、コアンモト、センドウ、ヤマミ、会計があった。これらの役は、盆と正月に半年に1交代わった。盆と12月にカンジョウがあった。アミモトには熱心な人に頼んだ。「年の占いで年回りがいいからおまえやってくれ」といって縁起を担いで頼むこともあった。盆と正月の話し合いはアミモトの家でやった。アミモトを選挙で決めることはなかった。

高いところで、イロ（魚群）を見て、双眼鏡とホウキを持って漁の指示を出す人がいた。これをイロミとかヤマミといった。ホウキは木の先へ鉋屑をつけてあった。ヤマミは毎年同じ人だった。

赤羽根町高松には組（一色、西脇、中村、谷倉、東脇、新井）ごとに地曳き網があった。地曳き網は1957年頃までおこなわれた。谷倉では、路地野菜とタバコ耕作をやり、1965年から1985年には養鶏もおこなった。1975年頃からは電照菊が主体となった。現在、谷倉では漁業はおこなわれていない。新井では有志で観光地曳き網をおこなっており、西脇ではチリメンヒキ（2艘引き）をおこなっている。

高松の一色の組には、西網と東網の2網があった。西脇の組には1網あり、カネニシ網とか西脇網と呼ばれた。中村の組には1網あり、カネナカ網とか中村網と呼ばれた。谷倉の組には1網あり、ヤクラ網とかカネヤ網と呼ばれた。東脇と新井の組で1網もっており、ヤマカ網と呼ばれた。ヤマカ網のアミモトはほかの村の者であり、そのアンゴもいろいろのところから集まっていた。

1910年代後半から20年代の頃の、谷倉組のヤクラ網

についてみてみよう。谷倉の戸数は45から50だったが、地曳き網に30人から40人が出ていた。アミモトは選挙で決めた。アミモトの任期は1年。アミモトに1回なったら、以後やらなかった。アンモトのほかに、チョウツケマカナイ、ドウグジンマイ、ホウベミ、サバクリという役割があった。チョウツケマカナイは会計（1人）で、40歳前後の古参の人がなった。ドウグジンマイは道具を片づけたり管理をする人で、2人いた。これには、仕事に慣れてきた年功のいった人が当たった。責任のある役でもあり、網組の中でハバのきく人だった。ホウベは魚見役で、年を取って経験があって、目の達者な人が当たった。アカミ（魚群）が見えるとカケアミの合図をした。ホウキ（筐に白い布を巻きつけたもの）を2本作って、合図をした。ホウベには特定の人があたった。サバクリは、入ってきた魚を選別する人だった。入りたての人は網を運んだり、ろくろをひいたり、牛を連れてきたりした。また、イワシをニボシにして、出荷することを専門にする人がいた。この人をカコウバといい、2人いた。1つの広場とイワシを煮る釜を持っていた。

渥美町和地には地曳き網が2統あった。その一つは「和地地曳き網」（通称マルワ）であった。和地において株をもつ40軒によって構成されていた。1軒から一人ずつ出た。この網は1965年頃までおこなわれた。役割には、アンモト2名、オボシ（会計）1名、ホウベシ（魚見）があった。正月4日のハツヨリのときに、アンモトの家を集まって、その年のアンモトやオボシなどを抽選で決めた。アンモトは2人で、全体の統率をする人である。オボシは会計である。ホウベシは、筐にさらしをつけたホウキをもって、作業の指示をする人である。アタリ（分配）は、アンモト3クチ、オボシ1.2クチ、ホウベシやアンゴは1クチだった。漁に出るときには、アンモトが、朝の3時か4時頃に「クワイ、クワイ」（来い来い）とふれまわった。波が出て、漁に出ることができないときには、1節長く「クワイ」と呼んだ。

#### ④C型の網元

秋葉論文では、ひとつの網が特定少数の漁家の封鎖的な組によって共有され、その封鎖集団内に固定された網元をC型とした。筆者調査ではこのC型の網元は見出されなかった。しかし、秋葉がC型の例としてあげた田原町波瀬の地曳き網の組織は、ひとつの網が特定少数の漁家の封鎖的な組によって共有され、網元がその封鎖集団内に固定されていたのではなく、家族経営的な小規模な網組と特徴づけられている（村武1955）。これをC型とすれば、田原町白谷がこれに属する。

田原町白谷では、個人が1人から3人の仲間で地曳

き網をおこなっていた。これをコックリジビキと叫んだ。この地曳き網では、春先にコウナゴをとった。多いときで、終戦後に、18統から20統あった。片方の網で10人くらいで引っ張った。引っ張るときには村の子どもや女衆がてつだった。引き手に、最後にとれた魚を分配した。これをアガリビキと叫んだ。

白谷では家族単位で小型定置網が中心におこなわれてきた。1897年ころ、巻網の網で定置網を作ったのははじまりである。幡豆から定置網を教えに来た。はじめは、タルカクと叫んで、1斗はいるタマリダル（醤油の樽）をウケにした。現在の定置網は、1965年くらいから竹さおにつけて網を張ってある。それをサオカクと叫ぶ。タルカクからサオカクに代わった。1940年代頃までは1統の定置網を2家族で操業していたが、現在は、1家族で二つの定置網を操業している。朝4時から4時半くらいに定置網を上げて、朝5時には帰ってくる。

#### 小活

秋葉は、網元の存在形態から渥美半島の地域差を、半島の太平洋岸はB型、その内湾側はA型またはC型と指摘した。筆者調査の結果からいえば、太平洋岸にもA型の網元は存在した（渥美町和地）。太平洋岸のB型であっても、もとはA型からの変化という地域も多く見られた。また、内湾側でもA型からB型への変化が見られた。

秋葉が田原町波瀬の網元を「網がいわゆる株持ちで、特定少数の漁家の封鎖的な組によって共有され、網元がその封鎖集団内に固定するもの」として、これをC型の定義としたが、波瀬の事例からいうと、C型の網元とは家族経営的な小規模な網組のことである。C型は田原町だけにみられた。しかし、C型をそのようにとらえても、秋葉が予想したA型からB型へ変化する過渡的な形態としてのC型は見出されなかった。

## 2 網元と漁撈儀礼

秋葉論文で報告された網元の信仰的役割を検討するために、地曳き網の網組でおこなわれた漁撈儀礼についてまとめよう。

### ①豊橋市伊古部

#### アミモトの漁業神祭祀

アミモトはコンピラ様の掛け軸を床の間に飾った。アミモトが代わると、次のアミモトにその掛け軸が移った。盆正月には、床の間へお供えを上げた。

#### フナダマサマ

船を造るときに、ミョウセン（舳先）の根元を四角に切って、メ（サイコロ）を入れた。旧暦12月31日、そこにアミモトがオソナエモチ、オカザリをもっていき、正月1日には御神酒を上げた。1955年頃から新暦

でおこなうようになった。オオブネのほかの船にもフナダマサマが祀られていた。それぞれの船にお供えをした。女が船に乗ると怒られた。

#### オオアンバ

袋網の入り口についている浮きをオオアンバと叫んだ。2個ついていた。10センチ角で長さ40センチくらいのものであった。オオアンバには「ヤマニ西網中」と網組の名前が書かれていた。オオアンバをまたいではいけないといわれた。網を干すときには、アミモトが二つのオオアンバをお互いに立てかけて、またげないようにした。

#### ハダカマイリ

大漁のときには、オヒマチをアミモトの家でおこなった。豊川稲荷にお参りに行くこともあった。イナダが大漁になると、ハダカマイリをおこなった。イナダは貴重な魚だった。サバなどが大漁になってもハダカマイリはおこなわなかった。若い衆が2人、魚を下げて、パンツだけの姿になって、神社まで走った。魚のエゲ（エラ）だけを神社に供えた。残りの部分はハダカマイリをした若者のものになった。リュウグウサマの祠が豊橋の野外教育センターのところにあった。ハダカマイリではこのリュウグウサマにもお参りした。渥美半島の大山に参ったことはなかった。

#### 伊勢参り

1年に1回漁の合間にお伊勢参りに行った。ふつう、汽車で行ったが、船で行くこともあった。行きは静岡県舞阪の機械船で引っ張ってもらって行き、帰りは手こぎの船で帰ってきた。

### ②豊橋市東赤沢

#### アミモトの漁業神祭祀

小さな屋台にフナダマサンが入っていた。アミモトになるとその屋台が順番に回ってきた。アミモトは、それを家の床の間においた。船のフナダマサンには1網1網魚を上げた。それをアミモトが煮て、船の方に参った。床の間のフナダマサンにはオヒマチのときに魚を供えた。船にはサイコロが納められており、これをフナダマサンとして祀った。旧暦1月1日、フナダマサンにお参りをした。浜にシメを張って、塩、洗米、神酒を供えて、大漁祈願をした。

#### ヒマチ

網を直したとき、漁のあったとき、漁がないときなどにヒマチをおこなった。盆前と年末（12月30日）は半年に一度の勘定の時で、このときにはカンジョウビマチをおこなった。

#### 豊川参り・伊勢参り

5月頃、東風が吹いてくると、アミモト、コアンモト、チョウジンマイの3役が伊勢参りに行った。漁がないときには豊川稲荷にも参った。

#### ハダカマイリ

大漁のときにはハダカマイリをした。乗組員の中で一番若い者が2人、一番大きい魚をもって、お寺、ギョラン観音様、神社に裸で参った。

#### ギョラン観音様

海の中で何かやいやい言う声が聞こえるので見ると、観音さんが光って助けを求めている。ヤマサアミのアミモトがこれを拾って祀ったのが始まりという。かつては別の場所にあったが、そこが火事になったので、現在の場所に祀られている。毎月18日(23日か)にお祭りをしている。船がこの観音様の前を通るときには帆を下げた。

#### オオアンバ

網の中央の袋網のつくところに、六寸角くらいの浮きがあり、これをオオアンバといった。ヒノキで作られていた。そこにアミモトの名前が書かれていた。そのアンバをまたぐとどやされた。オオアンバにお供えをすることはなかった。

#### ③赤羽根町高松

##### フナガミサマ

アミモトが漁に出るときに船のミョウセン(舳先)にお参りした。

##### 千両祝い

漁獲高が千円を越えることが、1年に1回ぐらいあった。そのときには、千両祝いをアミモトの家でおこなった。夏の暑い頃、すだれをかけて浜でおこなったこともあった。芸者さんと呼んだり、餅をついたりして祝った。

##### アミユイ

網を作ることをアミユイといい、1年に1回あった。おもりの石(イヤイシ)を拾っておいて、アミユイのときに使った。網を張るのはばすことをフラスという。このときに、アカメシ(豆のご飯)を炊いた。村人はワッパを持ってもらいに行った。これを「アカメシをもらいに行く」という。

##### ハダカマイリ

大漁のときには、若者が、2人から5人、魚を1匹ずつ持って「エイホー、エイホー」と高松の八柱神社に裸でお参りをした。

##### 豊川参り・伊勢参り

豊川や伊勢へ交代で参った。土用波がたってきて、漁に出られないようなときに行った。全員でお参りに行ったこともあった。

##### オヤクサマ

11月8日をヨウカヤクシ、11月12日をジュウニヤクシといって、メイフク寺の薬師如来に網組でお参りに行った。

##### 大山

渥美半島大山の中腹には御獄神社(オンタケサン)がある。大漁のときにお礼参りに登った。大漁のたび

に祠をつくりかえた。船はその前を通るときには帆を下ろした。

#### ④赤羽根町赤羽根(赤西地区)

##### アミモトの漁業神祭祀

アミモトの家には、八代龍王の掛け軸とお札の入ったヤカタ(祠)が床の間に祀られていた。アミモトが代わると、新しいアミモトのところへハマオトコがこれらを移した。アミモトの妻は、朝と晩に、床の間にご飯を供えた。毎月1日と15日には、ミョウセン(舳先)にお参りして米、御神酒、塩を供えた。ミョウセンには十二フナグマという神様が入っているといわれた。

##### フナイワイ

旧暦2月11日のフナイワイには、和尚さんが四寸角のボンテンを、ホーベミ(魚見役)が魚見をするところに立てた。供養と大漁祈願をおこなった。

##### 千両祝い

大漁の時には、和尚さんに般若経をあげてもらい、ボンテンを立てた。アミモトの家で宴会をおこなった。田原町から芸者と呼んだこともあった。

##### 豊川参り

1月、5月、9月にはハマオトコが豊川稲荷に参った。

#### ⑤赤羽根町池尻

##### アミモトの漁業神祭祀

アミモトが祠を引き継ぐというようなことはなかった。機械船になってから、正月にオシメ、オミキ、オソナエを船のミサキ(舳先)にあげた。地曳き網のときには祀らなかった。ショウを入れてもらうということで、女のおしろい、紅、アミモトの奥さんの髪の毛を船大工が船の舳先に入れた。池尻には船大工が2軒あった。そういうことは地曳き網の船にはなかった。

機械船になってから、アミモトはアミモトをやっている限り「おっかさんにはさわらない」、「不浄にはさわらない」といっていた。アミモトは1年ごとに正月のカンジョウワイワイに交代した。漁がないとアミモトの責任になった。機械船には、アミモト、会計、オボシ、機関士の役割があった。

##### ベンテン

アミモトが海から流れてきたベンテンサマを拾い上げたという。現在も11月20日ごろにベンテンサンの大祭をおこなう。

##### 伊勢参り・豊川参り

伊勢参りには、セコ単位で地曳き網の船で行った。豊川稲荷にも参った。渥美半島の大山には行かなかった。

##### ヘンビ神社

赤羽根にヘンビ神社という漁師の神様がある。地曳

き網で大漁したときには、アンモトがそこへ魚を供えた。ハダカマイリはなかった。機械引き（2艘引き）になってからは行かなかった。

#### ⑥渥美町和地

##### 袋網完成の祝い

綿糸で袋網を作ったときには、ボタモチを作ってフルマイをした。袋網が完成すると、枕くらいの大きさのぼた餅を作って、袋網の上に供えた。大漁のときにフクロコカシという歌を歌いながら袋網をあげるのだが、袋網が完成したときにはそのままごとをアンモトの家でおこなった。大漁祝いもアンモトの家でおこなった。

##### カンジョウ祝い

漁期の最後にカンジョウ祝いをおこなった。オボシが会計報告をした。総水揚げの半分が網の分として、共同の経費になった。後の半分を人数で割った。アンモト2人に3クチ、オボシに1.2クチ、ホウベシやほかのアンゴは1クチだった。

##### オイビスサマ

10月20日のハツカエビスにアンモトの家で酒を飲んだ。

##### ボンギ

ホウベ（魚見）をするところに、毎年の年末にボンギを立てた。三寸角で一間くらいの柱にコウシャク寺で字を書いてもらった。お寺には酒一升を持って行った。

##### 秋葉サン

ホウベにまつられている。第2次大戦中の食料難のときにすたれたが、戦後、地曳き網のアンモトが米を集めて、ナゲモチをした。ホウベから浜へ餅を投げた。

##### 伊勢参り

漁の始まる前（4月）、伊勢参りをした。地曳き網をする船には機械がついていないので、機械船に引っ張ってもらって行ったり、船を漕いで行ったりした。青峰山にも参った。

#### ⑦渥美町中山

##### フナオロシ

正月にフナオロシをおこなった。正月2日に、松と竹を飾って、しめ縄を張って、餅と御神酒を供えた。その後、オヤカタの家に集まった。

##### フナダマサン

新造船にはフナダマサンを船のキョウセン（舳先）に船大工が納めた。オヤカタが、船のキョウセンとオオタカ（胴の間）に酒を供えた。お供えは満潮のときに上げて、サゲシオ（干潮）にはおこなわなかった。

##### ボンテンサン

大漁の時には、神明社に魚をもって行って、ネギさんにご祈禱してもらった。また、コウナゴの大漁をす

ると、納屋のところにボンテンサンを立てた。ボンテンサンとは、六尺くらいの松の木の枝のついたものである。中老くらいの若い衆が松の木を切ってきた。ボンテンサンにはぼた餅を供えた。ボンテンサンは網が終わるまで立てておいた。

##### マンナオシ

ぼた餅を作って、神明さんにお供えした。縁起直しの酒盛りをした。

##### エビス講

10月20日エビス講だったが、漁の最中だったので、エビス講は漁が終わってからオヤカタの家でおこなった。

##### アミノカンジョウ

コウナゴアミでは6月の暮れ、フエアミでは旧正月の前に勘定がおこなわれた。アンゴがオヤカタの家に集まって飲んだりした。

##### 青峰さん

青峰サンのお札が船に上げられている。

#### ⑧渥美町宇津江

##### フナマツリ

正月2日にフナマツリをした。朝の暗いうちからアンゴたちが浜に出た。一番若い者が「ホイ、ホイ」と呼び、アンゴたちが「ワッショイ、ワッショイ」と網を掛ける真似、船を漕ぐ真似、網を曳く真似をおこなった。オヤカタはお供えの餅を短冊形に切って、そこに金額を書いたものを用意した。金額は大きいもので「一万円」と書いた。模擬的な地曳き網漁をした後、アタリとって、オヤカタからこの餅をもらった。餅は米を入れた升の中に入れていて、ここから取った。升は金庫に見立てられた。アタリがいくらと書いてあるかを見るのが楽しみだったという。この後、オヤカタの家で御神酒を呼ばれ、正月料理を食べた。

##### 豊川参り・秋葉参り

フナマツリのとき、豊川稲荷に代参に行く者を2人決めた。決まると正月2日にすぐ出かけた。秋葉山の代参にも網組で行くが、これは区で行く人といっしょに出かけた。代参に行くのは年の若い順だった。

##### 大漁祝い

特に大漁をしたときには、1泊2日で豊川稲荷にお礼参りに行った。これをアガリ参宮といった。不漁時にも豊川参りに行った。

##### 伊勢参り

秋網を出す前に2泊3日で伊勢参りに行った。このときには秋網の動力船を使った。（宇津江の事例は服部誠氏の聞き取り調査資料を用いた。）

#### ⑨田原町白谷

##### リュウグウマツリ

8月15日にリュウグウマツリをおこなっている。か

つては、旧暦7月20日ごろであった。浜に砂で亀の形を作って、八大龍王神をまつ。亀の上に祭壇を作る。長仙寺から住職がきて、お経を上げる。現在も行われている。

#### 豊川参り・伊勢参り・大山参り

正月2日に大漁祈願で豊川参りに行った。漁業組合員全員がまとまって行った。1晩オコモリして（一泊して）朝ご祈禱してもらった。伊勢参りには、漁師ではなく、村の代参で行った。大山参りをしたことはない。

#### 小活

秋葉は、赤羽根町高松（一色地区）における網元の自宅での漁業神祭祀と網元交替に伴うその祭祀の移動を報告した。このような事例は豊橋市伊古部、豊橋市東赤沢、赤羽根町赤羽根でもみられた。伊古部ではコンピラの掛け軸を、東赤沢ではフナダマの入った小屋台を、赤羽根では八大龍王の入った祠を祀り、それらが網元の交替により新網元の家に移動した。赤羽根町内であっても、池尻では、網元が祠を引き継ぐというようなことは聞かれなかった。

#### 結論

(1) 地曳き網の網元の存在形態から渥美半島の地域差をまとめれば、渥美半島では、田原町以外で、A型の網元が存在した。それらの地域では、A型の網元から

B型のそれへの変化がみられたが、伊勢湾に面する渥美半島西浜沿岸（渥美町中山）ではその変化はなかった。もとはA型であったという伝承を持たないB型は渥美半島太平洋側（豊橋市伊古部と赤羽根町高松）にみられた。C型は秋葉の定義とは異なり、家族経営的な小規模な網組であるととらえなおした。そのC型は渥美半島三河湾沿岸の田原町だけにみられた。

(2) 網元の家における漁業神祭祀がみられた地域とその網元の類型は、渥美半島の太平洋岸（豊橋市と赤羽根町）におけるB型の網元である。しかし、渥美半島太平洋岸において、B型以前に、A型の網元でそのような祭祀が行われたどうかは不明である。A型の網元によって祭祀されていた漁業神が、B型の網元へ変化する過程で、漁業神が網元間を巡回する形が形成されたものと予想される。

#### 引用文献

- 秋葉隆 1953「網元の信仰生活」『愛知大学総合郷土研究所所報』6・7号  
 伊古部郷土誌編集委員会 1988『伊古部郷土史』  
 島本彦次郎・村武精一・牧野由朗 1957「波瀬のモノグラフ」『愛知大学総合郷土研究所紀要』3号  
 竹田旦 1949「赤羽根の村組織と漁業」『民間伝承』13巻9号  
 村武精一 1955「漁業組織と村落構造—渥美半島の場合—」『愛知大学総合郷土研究所紀要』2号

（平成15年8月18日受理）